

# 国木田独歩の少年小説

北原泰邦

## 一 独歩と児童文学との関わり ―伝記文学を中心に―

国木田独歩（一八七二・七〜一九〇八・六）は自然主義作家として多くの短編小説を残したが、彼の小説には、少女を描いた作品が多く存在することも注意すべき特質である。その多くは、少年時代を山口で過ごした自身の体験や大分佐伯での教育時代に見聞した出来事がもとになっており、これらの作品は独歩文学の中でも一ジャンルを形成していると言つてよい。小山内薫は、「故独歩の作風に就て」（『新潮』国木田独歩追悼号 一九〇八・七）において、独歩の作風について、「自然を書いたもの」「恋愛及び夫婦問題を書いたもの」「宗教問題及び運命を解いたもの」「少年時代の追想」「キヤラクタア、スケッチとも云ふべきもの」の五つに分類しており、「少年時代の追想」を描いた代表作として、「少年の悲哀」「春の鳥」「馬上の友」「画の悲しみ」「日の出」などを挙げている。

児童文学研究者の桑原三郎は、「国木田独歩と『春の鳥』」（『論吉 小波 未明―明治の児童文学―』慶応通信 一九七五・一〇）の中で、「春の鳥」や「画の悲しみ」といった作品が、「人々に少年の心というものがどんなに柔ら

かで美しいものを伝えるのに役立つ」とし、「少年文学の先駆者として独歩を挙げることは必ずしも大きな間違いではない」と指摘している。また、福田清人は、「国木田独歩―少年を描いた作品を中心に―」（『児童文学・研究と創作』明治書院 一九七六・一〇）において、「登場人物の年少時を取り扱ったもの、或いは、そうした人物を併せて登場させた」小説として一七編を挙げ、「全小説の二〇パーセント強に及ぶほど、独歩の年少者に対する関心は強い」とし、「少年の悲哀」「春の島」の他に、「二少女」「河霧」「鹿狩」「非凡なる凡人」「山の力」などを掲げている。その上で福田はこれらの作品を、〈友情を取り扱ったもの〉（「二少女」「画の悲しみ」「馬上の友」「非凡なる凡人」「山の力」）、〈大人と少年との関係〉（「たき火」「源おぢ」「火ふき竹」「河霧」「少年の悲哀」「鹿狩」「初恋」）、〈教師と少年との関係〉（「日の出」「春の鳥」「肱の侮辱」「波の音」「泣き笑ひ」）という三つのジャンルに分類している。

近代日本の児童文学では、巖谷小波が「文壇の少年家」と称されたほど、その作中に多くの少年少女を登場させたことで知られている。小波は幼童を対象とした作風であったのに対し、独歩の場合は年長者を対象とし、大人や教師などの人間関係の中で、現実社会のさまざまな問題に直面する少年少女の精神的成長を描いた点に特質があるといえる。むろん、こうした少年少女の自立の物語が生み出された背景には、学問により一身独立して立身出世を目指すという明治期の社会的な要請のもと、日本の近代小説が形成されてきたことが影響している。とりわけ、少年少女を対象とした場合は、彼らを取り巻く教育観や人格形成とも密接に関わってくる。その意味において、独歩の少年小説は、立志を抱き社会の有為の人となるべく忍耐努力し、時にはその道から挫折して、社会の不条理さや人生の不可思議さを描出した点で、明治文学の中でも特筆すべきものであると言ってもいいだろう。たとえば、幼いころから『西国立

志編』を愛読した友人の人生を描いた「非凡なる凡人」はその代表格ともいえる作品である。また、「馬上の友」では、貸馬屋の少年が愛読する書物として『ロビンソン漂流記』やジュール・ベルヌの『海底旅行』『源平盛衰記』『三国志』が登場しており、これらの冒険・空想科学小説が、明治期の少年の想像力の源泉となり少年の立志に果たした役割も見逃せないのである。

また、国木田独歩の児童文学関連作品は小説だけにとどまらない。独歩は小説家として文壇にデビューする以前の「一八九五(明治二八年)末から一八九七(明治三〇)年のはじめにかけて、徳富蘇峰の民友社の依頼で、『少年伝記叢書』(全八冊)の執筆にかかわっている。その事情については、『欺かざるの記』(一八九五・一〇・二八)の中で、「民友社の小冊子を書き以て衣食することに定まりたり。／少年伝記叢書と題す。徳富氏と数回の相談を遂げたる結果なり。」と記されている。この点について中島健蔵は、「少年伝記叢書は、彼の抱負からいへば、必ずしも満足すべき企画ではなかつたが、けつして的外れな仕事でもなかつたのである。実際生活上の必要と、彼の理想とが、この叢書の中に織り込まれて行つた<sup>1)</sup>」と述べており、小説家として身を立てる決心が定まらない時期に、私生活では佐々城信子との恋愛結婚、破綻という波乱が続き、衣食のためと言いながら、独歩は全八冊の叢書を最後までやり遂げたことは注目値する。

明治二〇年代後半から三〇年代半ばまでは日本の児童文学の揺籃期とも言える時代だが、この時期には文学者の手による少年向けの伝記や歴史読み物が多く刊行された。その背景には、開化思想国家の有為の人材を育成するため、また、教育勅語の理念による父母への忠孝や礼節といった道徳観によって、若い世代に立身出世を促していこうとする国家

的思想に基づいた風潮が影響している。日本や世界の偉人伝記の紹介は、こうした青少年に対する啓蒙的な意味合いを持つており、『学問のすすめ』『西国立志編』などの開化期の啓蒙書とともに、学校の修身教科書に掲載されることで、多くの若者の志を刺激していくことになる。まず、博文館が刊行した叢書『少年文学』『家庭教育歴史読本』『日本歴史譚』『世界歴史譚』などが好評を博し、これに独歩が関わった民友社の『少年伝記叢書』が続く形となった。他に文学者が執筆したものととして、幸田露伴の『二宮尊徳翁』（『少年文学』第七編 一八九一・一〇）、高山樗牛の『釈迦』（『世界歴史譚』第一編 一八九九・三）、上田敏『耶蘇』（『世界歴史譚』一八九九・四）などが挙げられよう。こうした博文館の伝記・歴史シリーズの後発として、徳富蘇峰の民友社が、『少年伝記叢書』を企画し、蘇峰の紹介依頼もあつて独歩がその執筆に関わることになったのである。

さて、ここで『少年伝記叢書』の内容を刊行順に見てみたい。まず、『フランクリンの少壮時代』（一八九六・一）を第一巻として、第二巻は『両ケトー』（同二月）、第三巻は『リンコルン』（同五月）と続き、号外として『吉田松陰文』（同六月）、『横井小楠文』（同七月）を刊行し、第四巻『ネルソン』（同一〇月）、第五巻『子ルソン 下巻』（一八九七・二）、号外『ウエリントン』（同二月）という構成になっている。『欺かざるの記』（一八九六・一・二四）の記述には、「本日『フランクリン少壮時代』製本の上到着す。吾が文字一部の書となりたるは是が始めてなり。」とあり、自分の著作が初めて刊行されたことへの喜びを記している。ただし実際は、すべて無著名での刊行であり、発表当時、独歩の著作であるという事実は民友社など一部の関係者にしか知られていない事柄であった。また、叢書執筆当時は、佐々城信子との恋愛関係のただ中にあり、その後の信子との結婚生活という実際的な問題もあつての執筆であった。とはいえ、当

時の『欺かざるの記』をひもといてみると、独歩にとつて、少年伝記叢書執筆は、単に経済的必要に迫られた衣食のための仕事ではなく、「独歩の内面的な閱歴と深い関係を持つていた」<sup>2)</sup>(中島健蔵) 文学的営為の一つとして読み取ることができるのである。

たとえば、一八九六年三月一三日の『欺かざるの記』には、「研究すべきは人と自然なり。」として、伝記者の「私生活と公生涯」とは「コモンセンスに非ずんば調和せず。野心深くては調和せず、誠実ならでは調和せず。私生涯に於て独立の人、講習の前に於て信用の人、乃ち始めて大なる調和なり。」との考えを開陳している。また、同年八月一日には、「われはリンコルンを慕ふ。／ 茅屋の民にも美はしき品性の人あり。無学の人にも高尚の品性宿るあり。／ 品性は半ば遺伝なれども、また之を養ふべし。徳性を涵養し、氣質を変化するは此の事なり。されどこれ抑も末のみ。信仰の火を以て焼きつくすに如かず。」と綴っている。ここに示された「誠実」「コモンセンス」「品性」といった言葉は、独歩の少年小説に限らず、独歩文学の全体像を考えるうえでも重要なキーワードだと言える。つまり、独歩は少年伝記叢書執筆を通して、フランクリンやリンコルンなどの人間観や精神面に自身の精神性につながる部分を見取して、それらを血肉としながら小説家としての自己を形成していったのである。

試みにその一端を、『フランクリンの少壮時代』に見てみたい。一七歳のときにボストンを家出同然に飛び出したフランクリンは、フィラデルフィアで苦勞を重ねながら、印刷所を起こして成功を収めた人物であり、自身の半生を綴った自叙伝は人口に膾炙している。特に有名なのは、「節制・沈黙・規律・決断・儉約・力作・真実・正義・中庸・清浄・寧静・貞節・謙遜」という一三の徳目を自身の慣習として課し、その徳目を実行することが成功へとつながるとい

フランクリンの精神性である。独歩は『フランクリンの少壮時代』の「結論」部分で、彼を評して次のように述べている。

意思の力強く、情に由て軽挙せず、物を解する敏活、事を決する確的、想像速く走れば曾て地を放れて浮ことなし。されば常に虚榮の上に立ち、我儘の情に駆らるゝなく、真一文字に其目的を迫て且つ暫時も挫折倦憊せず、堅忍不拔、遂に功を収めれば措かざるなり。

自家の業を建つる時も、公共の利を起こす時も、必ず準備あり、設計あり、手段あり、周到なる注意あり、而して其空名を避けて実効を収む。

吾人は彼れに於て人間の社会に立つ私生活と公生涯との心地よき調和を見る也。一私人としては独立、自信、勤勉、力作、節儉の人たり。公人としては義務に厚く親切にして綿密、真義にして忠実、進んで位を求めしことなく、隠れて責任を避けしことなし。

ここで独歩が挙げた、「独立、自信、勤勉、力作、節儉」による徳目に基づくフランクリンの精神性は、『西国立志編』で説かれたような「勤勉忍耐」などの自制的な徳目によって一身独立を目指す精神性とも関わり合いながら、立身出世を掲げる明治期の青年達に共有されていたスローガンでもあった。フランクリンは、この徳目の達成のために必要となる、効果的な時間の使い方を定めた時間割表とも言うべきものを作成して自己反省の材料としたのだが、独歩自

身もフランクリンに倣って、この徳目を逗子での生活に応用しており、自らの精神的な根幹部分と共鳴し合う内容が少年伝記叢書の記述には見え隠れしているのである。

ちなみに、『欺かざるの記』における、『フランクリンの少壮時代』についての独歩自身の記述を拾ってみたい。

フランクリンは宗教的直感を有せず。常識的推理と世間的剛勇と商估的計算と市民的道德とを有する人なり。宗教的天才を以て世を清め人の血を熟することは其の能に非ず。彼は市人の大模範なり。(一八九五・二二・五)

旧訳的に天地人生を見るべきか、新訳的に見るべきか。はたカーライル的に見るべきか、ウォールズウオース的に見るべきか、フランクリン的に見るべきか。西国立志編的に見るべきか。

兎にも角にも熱心に見よ。確信の上に立て。

人に対し事に対し、自然に対し神に対し、將に忍耐にして誠実に、剛毅にして大胆なるべし。

忍耐と勤勉と熟慮と謹慎とは、成功に達し、真理に入り、希望を与へ、天職を完からしむ。(一八九五・二二・五)

少年伝記叢書第一巻フランクリン少壮の時代を脱稿したり。

凡ての最初は此の身を天地の間に見出すに在り。説教、教育の最初は人をして其の身を天地間に見出さしむるに在り。人をして伝説、習慣、地上の衣を脱せしむるに在り。

善をなせよと言はず、寧ろ吾が生命其の物は実に不可思議極まるものなりと説くべし。(一八九五・二二・二八)

こうした「勤勉忍耐」による一身独立という伝記記述の方法は、『アブラハム、リンコルン』でも同様である。ケンタッキーで山林労働に従事する父を助けていた幼少期の「アブラハム」は、勉学の機会に恵まれなくても、「勉学の念は暫時も其心を離れず」、「師より受けたる僅か計りの課業を繰り返しく練習して其心を満足せしめしなり」とし、一九歳の時に、節制勤勉による「独学の効」あつて「禁酒論」「政治上の論」の二編の論文掲載に至り、「更らに荒き広き深き面白ろき此世の波濤」に乗り出すという成長過程が綴られている。こうした「忍耐」「節制」「勤勉」により少年を導く教訓的な記述方法は、いわば伝記文学の常套手段でもあつた。ちなみに、本書の結部で「聖書は神が人間に賜ひし者の中、最善の恩賜なり。世界の救主より来る善事は悉く此書に由りて吾等に通ず。(略) 余は真実此贈物を感謝す。」という聖書による救済観で締めくくられている点について、坂本浩は、私生活での信子との離婚問題という「現実的な問題の処理を迫られ、クリスト教的な救いを求める気持ちが動いたのだろう」と位置づけており、伝記における人物観と現実問題との関係を考える上でも興味深い。

ここで、『少年伝記叢書』に対する当時の批評文を挙げてみたい。

『フランクリンの少壮時代』

「少年立志の葉となすに足る」(『早稲田文芸』評)

「空論に馳せて実務を忘却せんとする今日の少年を益すること尠からざるべし」（『福音新報』評）

『両ケト』

「薄志弱行の徒多き世の中に斯る志操堅固の偉人を紹介するは世道人心に裨益すること少なしとせず殊に少年師弟の爲めには一種の立志伝ならん歟。」（『読売』評）

『リンコロン』

「本書は主として其幼年より青年に至り、苦学より立身に至るまでを詳記したれば、少壯者には殊に面白く読まるること々信ず。」

「寒貧の一少年か如何にして大統領となるに至りしかは、少年のよみものとして興味を与ふる者なるべし。行文平易にして少年伝記の名に負かず」（『青年文』評）

以上、総合的にみてみると、本叢書は少年向け伝記としての文章の平易さとともに、立志を抱く少年を教導する内容の読み物としての評価が多いのが特徴的である。独歩について言えば、『少年伝記叢書』の執筆に関わる中で、これらの偉人の精神性を自らの実際的な生の問題とも密接に関わらせながら、そこで得られた精神性を、自身の小説における人間に対する眼差しや人生を観察・分析する視点に反映させていったと考えられる。その意味で、独歩にとつて

伝記文学執筆とは、小説家としての準備期間であり、また私生活上の苦樂を抱えた時期でありながらも、後の少年小説への架橋となるべき文学的資質や精神性を養っていった重要な文学的営為であったのだと考えられる。

## 二 少年少女へのまなざし — 品性の美 —

独歩の習作時代の小品に、「吾が知る少女の事を記す」（てつぶ署名 『家庭雜誌』 一八九四・九）という作品がある。一八九四年七月、独歩は佐伯の鶴谷学館の職を辞し、山口県柳井の両親宅に約一か月滞在した。その少し前には、柳井での印刷所経営計画の話が頓挫し、鶴谷学館での生徒のストライキ事件による排斥運動など、独歩にとっては失意が度重なる日々が続いた。そんな折、以前からの知人であった麻郷村の吉見家を訪問し、吉見家の少女達をモデルにこの小品を書き上げたのである。『欺かざるの記』（一八九四・八・二四）には、「吾が知る少女の事を記す」てふ文を草す。家庭雑誌に投ぜんとてなり。吉見春嬢の事を記したるもの也。」との記述が見られる。吉見家は、独歩が柳井に帰省する際には必ずともいい程に訪れた場所であり、「帰去来」「少年の悲哀」などの作品の舞台にも登場している。ちなみに独歩はこの時期、『家庭雑誌』の雑報欄に「家庭小話」と題して、催眠・育児・調理などについての文章を記しており、そうした関わりもあってこの小品を執筆したものと思われる。作品そのものについて言えば、作家の背景を知るためだけでなく顧みられない程度の随想の類いではあるが、少年少女に対する独歩の考えの一端を知る上では重要な作品だと考えられる。

作品の冒頭は次の通りである。

吾が知る家に三人の少女あり。長女は今年十六歳、次女は十二歳、末は八歳。今茲こゝに記さんと思ふは次女が事なり。次女名を春と云ふ。性は之をかくし置かん。

たゞそれ少女が事のみ。別だん面白き事のあるにあらず。たゞ此の少女、其性質いかにも美はしく、逢ふて見る毎に、語る毎に、共に戯るゝ毎に、いたく吾を動かすところあればなり。

このように本作の趣意は、ひとえに吉見春嬢の性質を映しだすことに主眼があると示されている。加えて「春嬢」には、「高貴なる品性の感化力」が備わっており、その美德は「我等の口と筆とが誌し、目と耳とが知り得る更に幾倍なるかを知ら」ぬほどだと賞賛している。そして「春嬢」の美德の本質は、「凡ての様子甚だ静平しずかにして主一なり」「小児は兎角倦み易けれども此少女は倦むことなし」「燈火に石版を運び、独り筆算を独習しつゝあり」と、沈着で忍耐強く勤勉な少女の特性にあるとしている。こうした品性による美德は、『少年伝記叢書』のフランクリンやリンコルンに対する独歩の人間評とも通底する。すなわち、忍耐・勤勉・節儉による人間形成こそが、人間の「誠実」「コモンセンス」「品性」などの美德に通じるといった独歩の人間観・人生観である。

独歩は、自らの文学的営為における「品性」について次のように述べている。

品性の美なるより美なるはなく。品性の美は、『美妙』の感化によりて自然に養はれたるものより美なるはあらず。

(略) 美妙を感じざるものは断じて品性の高尚を望むべからず。

凡ては無用のみ、人間を見んと欲せば只だ品性を見よ。

美なる品性の人ほど幸福なるは非ず。

余は音楽の尤も人間品性を高むるものなるを信ず。

されど美妙最高の品性ある人物を描き出したる文学を以て尤も然りとなす。

詩人は最高品性の権化なれ。 (『欺かざるの記』 一八九四・四・七)

つまり、独歩にとつての「品性の美」とは、自身の文学的営為の根源ともいうべきものであり、詩人(文学者)はそれを描く化身たれと言つていたのである。「品性の美」の問題は、独歩文学全体を貫くテーマでもあり、少年少女を対象とした物語を描く上でも当然重要となる。独歩は、「春嬢」を評して、「決して地上のものに非ず、山林の女神殊に朝なくの露をあつめて此少女が心に吹き込みしならめと。玲瓏として玉のごとく清し。少しも虚飾といふを知らず、野の百合花の如く自然そのまゝなり。凡ての小児は悉く無邪気なり、されど此少女に至りては単に無邪気といはんより、一種の口にも言ひ難き品性をそのふ。」として、その美徳を賞賛している。ここから、独歩の描く少年少女の物語が、単に無邪気さや純粹さという側面だけでなく、一人の人間としての「品性」を備えた美徳の持ち主であるとい

う人間観に基<sup>3</sup>づいていることがうかがい知れる。

さらに作中には、「春嬢」という身近な少女の精神的な成長を見届ける視点だけでなく山間に名も知れずひっそりと咲く山百合のように、人知れず成長をとげやがて成人していく人生の不可思議さを伝えてもいる。作品結部では、「此少女今は山間寂寞の境に生長しつゝあり。此天使の如き少女が五年十年の後如何、五十年百年の後はいかなる可き。」と閉じられているが、ここからは、後の「武蔵野」や「忘れ得ぬ人々」で描かれるような、独歩の小民に対する眼差しによる人間観の一端が垣間見えるのである。坂本浩は、「吾が知る少女の事を記す」について、日清戦争が勃発する社会状況の中、吉見春嬢の品性の純真さを謳いあげる中に、「異常な環境の刺激を受けて浄化しきった独歩の姿を見るのである<sup>4</sup>」と述べており、この作品が単なる感傷的叙述によるものでないとしている。

このほかに、独歩作品で少女を扱った小説として、「二少女」、「指輪の罰」が挙げられる。「二少女」は、一八九八年七月の『国民の友』に掲載され、のち、第四短編集『濤声』に収録された作品である。これは東京電話交換局に勤務する交換手の二人の少女を描いたものである。物語は、両親を病で失った十九歳の交換手「お秀」の生活の窮状が中心に語られる。「お秀」は、交換手の傍ら針仕事などをして幼い弟妹を世話していたが、物価の高騰もあって生計を支えるのが困難となり、やむなく交換手の仕事を休むようになる。そんなところに、仲の良い同僚の「お富」が心配して「お秀」の元を訪れる。この二人の少女のやりとりを通して、貧しくとも妾に身を落とさず女性としての操を保とうとする女性の姿を客観的に描き出しているのである。独歩は作品発表当時、赤坂氷川町に居住していて、作品の舞台となった琴芝町周辺は虎ノ門にも近い場所にあった。物語は、琴平社のお堀端を歩く一八歳の女性電話交換手「お

富」の描写から始まり、作品全体は二人の少女の対話によって構成され、その会話から二少女の性格が浮き彫りになる構成となっている。電話交換手は、明治二〇年代になって登場した職業であるが、やがて明治三〇年代になると女性の職業として認知されるようになった。貧しくとも女性としての品性を保ちつつ、社会の変化に翻弄されながらも必死に生きる二人の少女の姿に対しては、「さりげないなかに哀感がこもっている」<sup>⑤</sup>、作品との評価がある。特に、幼い弟妹を必死に養育する「お秀」が、貧窮生活に喘ぎながら妾に身を落とすことなく女性としての自我を守ろうとする部分に独歩の女性への眼差しの本質が感じられる。本作に登場する少女はいずれも一八、九歳の女性であり、必ずしも青少年少女を対象とした目的で書かれたわけではないが、困難な環境に耐えつつも品性を欠かさずに生きる女性の姿を描いている点で注意すべき作品である。

これに対して、「指輪の罰」(『婦人界』一九〇二・一一)は、一三歳の二人の少女が登場する作品である。鎌倉の別荘に滞在する「夏子」は、「未だ浮世の風いかばかり塩辛きやを知るべき道理」をわきまえずに甘やかされて育てられてきた。近所の別荘に住む友人「浪子」は、「夏子」が「金剛石だいやもんどの指輪」をねだっていたことを聞き及ぶと、「夏子」が浜辺でまどろんでいる間に密かに、自分の「真珠の指輪」を嵌めてあげる。ところが、「夏子」に嵌めた真珠の指輪は容易にはずれない。「夏子」は、夢の中で林をさまよううちに指輪を拾い、それが抜けなくなったのは「余り母上に強求て母上を困らした」ためであり、「此指輪は必定神様が罰の徴にあたしに下すつた」ものであると、己れのがままさを自覚することになるのである。

作品そのものは、「平凡で稚拙な少女小説」<sup>⑥</sup>と評され、わがままな欲求(我欲)が過ぎると天罰が下るといふ古典的

な教訓を含んだ内容となっている。と同時に、二人の少女が互いを思いやる友情の絆がテーマでもある。浪子は、夏子の欲する指輪を人知れず与えてあげたいと一途に思い、その親切心への返礼として夏子は、浪子の父親の外国土産である「秘蔵のバイオリン」を贈る。二人の少女が互いを思い合う心のあり様は、「楽しき夢に入りたらんごとく」、夏子のバイオリンと浪子の歌声との調和の場面によって象徴的に語られていく。この二人の少女の姿は、独歩の理想とする「品性」を備えた少女のイメージが投影されていると言えよう。

ところで、もう一つ興味深いのは、夏子に我欲を知らしめる方法として、〈夢〉の世界を展開させて少女の幻想世界を描いている部分である。美しい海浜の景色さえも視界に入らない夏子の「金剛石」への欲望は、「たゞ金剛石の指輪のこのみ胸に充ち、海の果なる雲の畳々たるを見ても、心は彼雲を分け入りて金剛石の指輪のみを求めぬ」と表現される。後に夏子がさまよう夢の世界は、浜の真砂の美しさを宝石にたとえて、あたかも「兼ねて夢見た仙境」といった、少女のメルヘン的な欲望を映し出す幻想空間として表現される。この夢の世界の一方で、夏子は薄暗い森に閉じ込められ悪い魔法にかけられたように、指輪が突然肩もめり込むほど重くなり、両手の指を引きちぎるほどに痛み始める。ここには我欲による罰という教訓的テーマが示されていることは言うまでもないが、同時に、おとぎ話のメルヘンの世界に夢想する少女の願望があらわれている点に、独歩の少女小説の独特の世界観が醸し出されている。

以上、独歩の少女を対象とした作品を見てきたが、全体としてはそれほど作品数は多いものではなく、作品の完成度としても必ずしも高いものといえないが、この時期、独歩がひとつの理想として捉えていた「品性の美」に裏つけられた人間性が具現化されている点で、これらの作品は、独歩の少年小説を考えていくうえのひとつの手がかりにな

るといつていいだろう。

### 三 絵画の魔力 — 「画の悲み」を中心に —

独歩には、少年期を過ごした山口での体験を回想した作品群がある。その作品の多くは、一九〇二年から一九〇三年までに書かれたものである。たとえば、「画の悲み」「少年の悲哀」（一九〇二・八）「馬上の友」（一九〇三・五）、「山の力」（同年八月）などの作品群は、いずれも独歩の幼少年期の山口県岩国や柳井での回想をもとにして成立したものである。一九〇二年は、独歩三二歳のときである。私生活の上では一月に長男虎男が誕生し、二月には鎌倉に居を移して、妻治子と長女貞子とともに比較的安定した家庭生活を送っていた時期である。経済的には必ずしも恵まれていたとはいえなかったが、鎌倉での生活は独歩が旺盛な執筆生活を送った時代であった。この比較的安定した生活が少年時代の懐かしき過去に思いをめぐらせ、叙情的な少年時代の回想物に筆をとらせた一因でもあったのかも知れない。ここでは、この時期に書かれた少年期を回想する小説を考察してみたい。

「画の悲み」は、画を描くことが好きな「自分（岡本某）」が、画に関してはライバル関係であった「志村」という少年と画を通じて友情を結ぶに至る過程を、山口の自然描写を交えた甘美な郷愁物語として描いている。しかし、物語後半で、東京に遊学して故郷を旅立った「自分」が、二十歳の時、久しぶりに故郷へ帰ると、「志村」は一七歳で病死したことを知り、「言ひ難き暗愁」に陥ることになる。本作は、遺稿「画」（一八九三・四 記）と題したノートを改

作したものであり、その素材は独歩自身の体験に基づいている。

予は唯観ることを好むのみに止まらず、自ら画かざれば満足せざりき。長じて小学より、中学に進むも、所謂画学なるものは数学とベースボールと与に予が最高の課目なりき。其うち画学に至りて、殊に甚しきものありたり。

曾て未だ小学校にあるや、予が友にて予より一級高き村田と呼べる少年、コロンブスを写したる事あり。非常の上出来にて全校大評判となりぬ。校長はわざわざ額縁を造らせて、コロンブスは教員室の一隅、大時計と並べて高く掲げられたり。毎日其前に人山築かれぬ。予も亦村田に其大名譽を祝したり、村田の眉の動き方、異様なりき。唇固く閉ぢ、一種の顫ふるひは、口の周囲より頬の肉に波動せり。予は彼の競争者なりし也。而して彼のコロンブスは全く彼の勝利となりぬ。(遺稿「画」)

作中に登場する「志村〔画〕」では村田「少年は、岩国の錦見小学校時代の学友『市川秀助』がモデルとされてい<sup>⑦</sup>る。錦見小学校時代をよく知る同窓の永田新之丞は、市川秀助について「非常におとなしい子供で、熱心な勉強家」であつたと回想している。<sup>⑧</sup>永田氏によると、小学校時代の独歩はいつでもクラス一、二を争う秀才であつたが、性格は放縦で、いたずら好きな餓鬼大将であつたという。また、喧嘩早い気質でもあり、自分の爪を武器にして相手の顔ががりがり引つ掻くことから、「がり亀」(独歩の幼名は亀吉)と呼ばれていたという。ちなみに、チョーク画については、独歩の弟収二は、「読書に次いで耽つたのは絵画で、チョーク画をよく書いていた。帰省中、近所の人の肖像画を書い

てやったりして大分得意であつた。」と回想しており、チヨーク画も独歩にとつて身近な素材であつたことがわかる。

遺稿「画」は、独歩の思想的一面を探る上で実に興味深い作品である。「画の悲み」が叙情性あふれた物語であるのに対して、「画」はより現実的で哲学的な内容となつている。冒頭部分の、「画は予が命なりと。命とは此宇宙に繋ぐ金線を云ふなり。」は、「画」の思想的一面を顕著に表している。「画」では、先に示した「村田」とのエピソードにおいて、実弟収二を想起させる「弟」と山野を跋涉し、さまざまな景観や事物をスケッチする場面が語られていく。その中で、「画の悲み」でも描かれた「馬」の凶に対する思いをひとつの「魔力」だとして、次のように記している。

悲馬風に嘶く凶、長髯を北風に波打たせて昂然として巖上に立つ馬を見る時には、わが心誇りて躍りぬ。花落ちて江堤、草煙の如き処、三歳の神駿蹄を揚げて去るを見る時は吾が血湧きぬ。曾て父大阪に上り、土産とて一本の扇子たまはる、開き見れば野馬数十を画きあり、或者は馳せ、或は嘶き、或は二足立に跳る、予は小躍りして喜びしことありき。

巖上に佇む一頭の馬が悲しげに嘶き、蹄を鳴らして何処ともなく立ち去る姿に心躍らせる程の魔力を感じて、その詩情を写し取ろうとする意欲がここには読み取れる。「画の悲み」でもやはり「借馬屋」の「馬」を画題としていることから、独歩の馬に対する思い入れの強さが伝わってくるが、彼にはまた、貸馬屋の少年との交流を描いた「馬上の友」という作品もあり、少年文学の題材としての動物が独歩においてどのような意味を持っていたかも興味深いテーマで

ある。

ともあれ、遺稿「画」の中心的な主題となっているのは、「画」に対する自分自身の心境や思想の変化である。画の題材を求めて弟と野山を駆け巡り、自然の景物の魔力に導かれるように画の世界に没頭した少年時代の美しい思い出と、二〇歳を過ぎて人生の現実や浮世の荒波を経験した現在の自分との間には大きな懸隔が生じていることを自覚する。その感慨は次のように記される。

悲しき変化は年月と共に来たりぬ、紅顔の頬の肉の落つると共に、<sup>ぐ</sup>動もすれば冷かなる涙の、蒼頬つたふと共に哀しき変化は寒霧の如く、画に対する感想の上に掩ひ始めぬ。曩には予画を好みたりされどそは自然なりき。馬の図、人物画、山水画、船舶の画、破宮古跡の画、薔薇花の画、夕影の画、水車の画、之に対する予は自然なりき。形、色、光、影の巧みなる配合の前にはわが無邪気なる心無邪気に躍りしのみ、予はたゞ花に眠る胡蝶の如く、或る自然の馨ばしき香にうたれて酔て自ら知らず、夢みて自ら知らざりき。

ここには、少年期に抱いた画に没頭する無邪気で率直な心が表現されている。あるいは、馬や山川といった自然の魔力に魅せられた少年の純粋な心のありようを語っているとでもよい。逆に言えば、その純粋で自然な心は喪失された過去の記念でもあり、現在ではそうした心で画（対象）を見つめることが出来ないジレンマが込められているとも考えられる。今や、「自然の夢全く破れぬ。画に向つて輝きし渠の眼、今は、画を観て暗涙を湛ふるに至れり」と

いう心境へと変化し、自然の景物の内に「回顧、記念、想像、黙示の深き悲き遠き幽なる音を聞く」という感慨を抱くに至る。つまり、「画」では、画に対する過去（少年）と現在（大人）との心境の対比を描きながら、失われた自己への哀感を観念的に映し出しているのである。

対して、「画の悲み」では、競争心がやがて友情に変化していく心情の移り変わりを叙情的に描くことに主眼が置かれている。例えば、自然豊かな野山を二人して写生し、通学路の道のりに映る光景に対して、「自分の心を夢のように鎖ざして居る謎を解くことが出来るかと、そのみに心を奪われて歩いた」という部分には、画の世界を通して未知の世界の扉が開かれることを希求する、少年の純粋な精神性が読み取れる。しかし歳月は、この少年期の思い出を甘美なものに留めてはおかない。青年期の自分は、「人生の問題になやまされ、生死の問題に深入りし、等しく自然に対しても以前の心には全く趣を変へていた」心境に至るのである。かつての競争相手であり、郷里の自然と友に深く心に刻まれていた旧友の面影はもうそこに発見することは出来ない。いまや、人生の現実や苦悩を知った「自分」には、故郷の風景も全く別の様相を以て映じるのである。ここでは、「画」で語られた画に対する自己の現実感を描き出すという手法ではなく、少年時代の友情関係を通して、生と死という人間世界の現実的側面への感慨が強調されることになる。

自分は久しぶりで画板と鉛筆を提げて家を出た。故郷の風景は旧の通りである。然し自分は最早以前の少年ではない。自分はまだ幾歳かの年を増したばかりではなく、幸か不幸か、人生の問題にもなやまされ、生死の問題に深入りし、等しく自然に対しても以前の心には全く趣を変へて居たのである。言ひ難き暗愁は暫時も自分を休めない。(略)

闇にも歓びあり、光にも悲あり麦藁帽の庇を傾けて、彼方の丘、此方の林を望めば、まじくと照る日に輝いて眩きばかりの景色。自分は思はず泣いた。

ここでは、画に没頭することで未知なる世界の謎が解明されるような、汚れない純真な心はすでに喪失されてしまっている。この点について桑原伸一は、人間存在そのものの苦しみを見いだし、「深い人生の哀愁の響きと、人間は苦悩に陥れば陥るだけ、純粹無垢な少年の日への激しい郷愁にかられるという人間本然の姿が暗示されている」と指摘している<sup>⑩</sup>。換言すれば、「画の悲み」には、少年時代の甘美な郷愁にとどまらない、人生そのものが抱える現実的な苦悩と喪失の物語が内包されているのである。こうした人生の哀感を描いている点では、「少年の悲哀」も同様である。一二歳の少年が感じる不遇の青楼の娼婦に対する悲哀は、「少年の歓喜が詩であるならば、子供の悲哀も亦た詩である。」という、少年の眼差しを通じた現実感と人生のはかなさに通じていく。独歩は、二〇歳前後の時に、郷里山口の港（山口県熊毛郡曾根村の水場）で邂逅した、一六、七の娼婦とおぼしき少女をモデルとしながら、漂泊の人生を送る女性の悲哀を哀切に紡ぎ出してみせた。

以上、「画の悲み」と小品「画」を通して、独歩の少年期に没頭した画に対する思いと、そこから生じる人生の現実的側面を考察してきたが、こうした点に独歩の少年小説のひとつの特質を見ることができのではないかと思う。

#### 四 探究心と冒険心の物語 —「山の力」を中心に—

最後に、少年の探究心と冒険心を主題とした小説「山の力」について考えてみたい。「山の力」(『少年界』一九〇三・八)は、小中学校時代の山口での自身の体験をもとにしている。一八八五年七月に、独歩の父専八が転勤のため一家は萩に移住したが、独歩は山口中学の入学試験に合格したため一人中学校の寄宿舎に留まり、上京までの数年間、この地で多感な成長期を送ることになる。独歩は、この寄宿舎での生活を通して、作中に登場する方便山(実際は東鳳翽山と推測される)に登ったり、「馬上の友」(『青年界』一九〇三・五)で描かれる貸馬屋の馬で郊外を散策したりするなど、将来の夢や野心に燃えた少年時代を経験することになる。「山の力」は、こうした山口寄宿舎時代の青春期を源泉として、少年の飽くなき好奇心やあこがれを描いた作品である。

一四歳の「私」は、級友「大友直次郎」の家に遊びに行った折、その兄(直太郎)が示した磁石石の不思議な魔力に魅せられ、その石を手に入れるため、次の休日に直次郎とともに東方便山に登ることにする。軍歌などを歌いながら意気揚々と山に登り始めた二人だったが、行けども行けども山頂への道のりは遠い。見知らぬ山道の険しさに疲労した二人に突然の風雨が襲う。進退窮まった二人は、以前は金山の跡であり、盗賊が住むうわさがある洞穴に逃げ込んで辛うじて難を避ける。そこでようやく拾った石を持ち帰って実験してみたところ、本物の磁石石ではないことが判明して失望する。数週間後、再び方便山への登山を果たした二人はようやく求める石を手にし、早速、磁石石の手工品を家の父母姉妹の前で披露して無邪気に喜ぶのである。「山の力」は、「画の悲み」「馬上の友」などと同様に、少

年時代の友情関係が中心的主題となっている作品だと言える。ただし、前記の二作品が友人との交友を描きつつ、その中に人生の哀感や現実感を漂わせているのに対し、本作では、少年期に抱く知的好奇心や冒険心を明るく筆致で描いているところに特色が見られる。

とりわけ「山の力」では、少年の心を引きつける磁石石が、彼らを科学的世界へ誘う好奇心の源泉として機能している点が注目される。こうした背景には、明治期に刊行された科学的読み物が、当時の学校教育に導入される過程の中で、近代的な科学的見地に基づく自然観が醸成されていたことが影響している。明治維新以後、新政府は欧米の先進諸国をお手本として積極的に政治や社会の仕組みを変革しようとした。そこで国民を開化に導くためには、実用的な学問を学ぶことが説かれ、近代的な教育制度を確立する必要に迫られたのである。このため、福沢諭吉は物理学の必要性を説き、国民を開化思想に導く方法として、まず、窮理（物理）学を広く知らしめることを目指した。福沢は、一八六八年に『訓蒙窮理図解』を著して、科学知識を児童にもわかりやすく通俗的に解説した。その内容は、「温気の事」「空気の事」「水の事」「風の事」など全一〇章の構成で、物理学の基礎的知識を子供にも理解しやすいよう、五〇点以上もの挿絵を用いて詳しく説明したものであった。たとえば、第一章「温気の事」では、「世界に温気なくば万物忽ち縮て形を失ひ、禽獸草木も生を遂げず、いかでこの世の機を保つべけんや。抑温気に四の源あり。」として、太陽の温気の仕組みについての解説を施していくといった具合である。

この福沢諭吉の高弟に、慶應義塾の二代目塾頭であった小幡篤治郎がいる。小幡は、『天変地異』（一八六八年）を著し、「鯨が地震を起こす」「雷は天の怒り」といった類いの俗信を解き、雷・地震・彗星・流れ星などの自然現象に

は科学的な道理や因果関係があることを説明した。こうして、明治初期における科学読み物は、『窮理図解』『天変地異』が口火となり、一八七二年の「学制」制定以後、それらの啓蒙書が教科書として広く読まれるようになると、窮理書が数多く出版され「窮理熱」ブームが沸き起こることになるのである。やがて、科学読み物の出版は、一八八六年の「小学校令」により、物理学や化学などの教科を統一した「理科」が誕生することでもふたたび活況を呈することになる。バックレー著・山県悌三郎訳の『理科仙郷』（一八八六年）、霞城山人の『理科春秋（春）』（一八九〇年）は、「理科」という名称が冠された科学読み物の代表的作品である。

また、一九〇二年には、石井研堂の『少年工芸文庫』（博文館）などの科学読み物シリーズが刊行され、物語仕立てで科学的知識を紹介する読み物が人気を博していくことになる。いわば娯楽としての科学的読み物が登場してくるのである。「山の力」に描かれた磁石石への魅力は、こうした科学読み物の流行によって提供された、少年期に抱く未知な世界や対象への知的好奇心や、採取した石の磁力を実証しようとする探求心と関連しているのである。

その一方で、磁石石を求めて未知の山に勇んで進んでいく姿や、突然の風雨に進退窮まり、盗賊が住むうわさのある金山跡で難を避けようとする場面などからは、不安と恐怖と闘いながら磁石石を追い求める少年冒険小説的な高揚感を読み手に与えている。たとえばそれは、明治三〇年代後半に多くの少年読者を獲得した、押川春浪の「海洋軍艦」シリーズなどの冒険・探検小説とも関連して考えることも必要であろう。未知なるものや未来への浪漫的憧憬は、海洋や山岳など、秘境的空間への冒険によって満たされる少年の探究心や好奇心ともつながっているからである。その意味でこの時期に、独歩と春浪が鎌倉で交友を結んでいたことは、作品に対する作家的背景を考える上でも興味深い

事実である。押川春浪は鎌倉時代の独歩との交友について、「その頃私が冒険ものを書いて居たので、よく冒険もの、材料など話して聞かして呉れた。いつも不思議のロマンチックなもので、薄暗いランプの下で老翁が陰怪なことを語るといったやうなものだつた。」と回顧している。両者の作品の中で、どの程度の部分にこうしたやりとりが反映されているかは定かではないが、少年小説に深い関心を持ち多くの作品を残した独歩にとって、押川春浪との文学談義がそれなりに刺激的なものであつたことは想像に難くない。

もちろん、「山の力」では、未知なものを求める少年の純粹な探究心や冒険心だけが中心に描かれているわけではない。少年の心を虜にする「方便山の恐ろしい磁石力」という物語結末の一節には、山や自然が秘めた不思議な力が自然の磁場となつて、少年期の冒険心や探究心の源泉となつていることをも示しているのである。こうした山林自然へ「あこがれは、「なつかしきわが故郷は何処ぞや／彼処にわれは山林の児なりき」（「山林に自由存す」）や、「武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしない。どの路でも足の向く方へゆけば必ずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。」（「武蔵野」）など、独歩文学の本質を考える上でも重要な作品と言えるのである。

以上、幼少年期の追想をもとにした作品を見てきたが、独歩にとつて少年期の自己を回想する視点は、作家としての自己を形成した原点を確認する創作的営為であると同時に、この時期の創作姿勢を考える上で重要な作品群であると考へられる。今回取り上げられなかった、「非凡なる凡人」「馬上の友」などの諸作についてはさらに稿を改めて論じたい。

- (1) 『定本 国木田独歩全集八』(学習研究社 一九六五・二) 解題。
- 以下、本稿での作品本文の引用は本全集のテキストを用いた。
- (2) (1) の解題に同じ。
- (3) 坂本浩『国木田独歩―人と作品―』(有精堂選書 一九八九・六)。
- (4) (3) の著作に同じ。
- (5) 平岡敏夫『短編作家 国木田独歩』(新典社選書 一九八三・六)。
- (6) 瀬沼茂樹「解題」(『定本国木田独歩全集』二)。
- (7) (6) に同じ。
- (8) 永田新之丞「小学校時代の独歩氏」(『新潮』追悼号 一九〇八・七)。
- (9) 国木田収二「独歩の半生」(『新潮』追悼号 一九〇八・七)。
- (10) 桑原伸一『国木田独歩―山口時代の研究―』(笠間叢書 一九七二・二)。
- (11) 押川春浪「鎌倉在任前後の独歩氏」(『新潮』追悼号 一九〇八・七)。